

令和元年度 第2回学校評議員・学校関係者評価委員連絡会 議事録

令和元年11月16日（土）10:00～12:15 校長室

今回は主に防犯をめぐる地域、保護者、学校のかかわりが話題になりました。

地域とのかかわりについて

○地域と小学校

- ・地域として関わってきて、芝川小は子どもを取り巻く団体が上手に付き合っていると感じる。（ソフトボールチームなどの大人の団体も含め）
- ・校庭開放団体も20年ほど前から動物飼育のボランティアをしている。
- ・夏祭りで、地域が交流の場を提供してくれるのはありがたい。
- ・自治会としては、たくさんの子どもが来てくれることで地域が活性化する。

○中学校との違い

- ・中学は部活動などもあるため、地域のかかわり方が複雑。
小学校と比べると中学は確かに地域や保護者とのかかわりが少ない。登下校についても中学生は自分で来るし、具合が悪くても家の人に迎えに来てもらわない。
→小学校は地域や保護者が関わらざるを得ない。
- ・小学校では、地域で子どもを守らなければいけないという雰囲気を感じる。
中学は自立という視点で見ることが多い。
- ・未来くる先生は、中学なりの地域とのかかわり。
小中合同引渡し訓練もよい取組だと思う。
- ・中学生は偏差値の中で生きていくため先生と対立しないことが大切のように見える。
小学校と比べて生きづらさを感じる。
→できる、できないという見極めについて、小中の見方は違う。小学校では今できなくても大丈夫と考えるが、中学校はここまでできてほしいという思いがある。

不審者対応について

- ・危ない人を見たら迷わず警察に電話。「面白いものを見せてあげる」などと言って子どもを誘う不審者が実際にいる。危ない人を見極める目を育てることが重要。
→どんな人が危なくてどんな人が大丈夫か、本来は家庭で教えるもの。子どもの判断を当てにすることはいけないのではないか。（注：別の評議員の意見）
- ・不審者の数は、実は全国的に減少傾向にある。だが、マスコミにとって不審者の事件は扱い易く、そのため大々的に報道して不安を煽る。それを見た視聴者の一部が神経質になり、LINEなどで不安を拡散させてしまう。
- ・危ないと言って漠然と不安を拡散するよりも、実際に地域を見回る行動を起こすことによってゼロ（動かない）を1（自分から動く）にしてほしい。
不審者と呼ばれてしまう人も、知り合いになれば不審じゃなくなる。皆が警戒し過ぎるとますますその人が孤立してしまう。
「事件が起きた」＝「危ない地域」ではない。

- ・自治会での防犯は、高齢化しているため年々難しくなっている。地区内の不審者情報も自治会に届きにくくなっている。ある自治会などは3箇所の学区にまたがっておりパトロールをやるとしても回数を増やしづらい。
- ・見守りタオルのようなものがあると、関わりのある人が一目でわかって有難い。
→月1回パトロールをやるときには、防犯ベストを敢えて着ないこともある。着ていると用心されて、かえって地域の本当の姿が見えないため。

P T Aと登下校

- ・登下校について学校ができる限りのことをしてくれているのは分かる。負担がかからないようP T Aが協力して、授業に専念してもらうのがよいと思う。
子どもたちの人間関係で、校内の関係を引きずっている場合は学校の協力を仰ぎたいが、それ以外は保護者同士の話し合いにしたい。
登校班と違って1・2年の下校班において地区環境部は班編成に関わるだけ。実際面倒を見るのは1・2年保護者であり、班内での解決が難しいようだ。
- ・パトロールは学校任せではなく自分たちでやるという意識を隅々まで伝えたい。
そのために地区単位で情報を発信し、見守りタオルなどを活用して協力できる大人を増やしていく工夫などをしていく。
- ・学童としても（学校任せではなく）帰り方について保護者に連絡し、並んで帰るなどの指導を家庭に依頼している。パトロールも継続的に行っている。
- ・鍵っ子が増え、下校班のエリアが広がることも心配。

今後の教育について

- ・これからの教育が正解のない新しい方向へ進んでいるのを感じる。
- ・今後は「人が何のために生きるのか」「人間の幸せとは何か」といった、人としての生き方や在り方が一層問われていく。
そのためにはゆとりや寛容性が必要。学校教育における道徳教育の重要性も増すだろうし、評価の在り方も見直していかなければならない。
- ・家庭で子どもを100%育てることは難しい（30～40%程度）。残りを学校と地域が連携して支えなくてはならない。

働き方改革が叫ばれる中、文科省の諮問機関である中央教育審議会は、登下校に関する対応を「基本的には学校以外が担うべき業務」と分類した。子どもたちを支えるという目的を見失わないためにも、学校、家庭、地域がどう連携していくのか、ますます考えなければならない。また、A Iが社会進出する未来に向けて、どの立場からも「人としての生き方」が問われるとの指摘が多く挙げられた。生き方は学校だけで育つものではないし正解もない。私達教員や保護者といった周りを取り巻く大人が、悩み、選択しながら進む姿を見せることが、子どもにとって一番の学びとなると感じた。

文責：小松